

NPO法人新町川を守る会 理事長

中村

NAKAMURA
Hideo英雄さんに伺いました

聞き手

苗村 由美

編集委員

亀谷 一洋

編集委員

[writer] 駒崎 文男

[photo] 永田 正男

「できる人が、できるときに、できることを」、「一人の百歩より百人の一步」を基本に20年間活動されている中村氏にまちづくりのあり方をお聞きした。

2009年7月14日(火)
土木学会役員会議室

幅広い活動で、
川からまちを変えていく

「新町川を守る会」は、1990年3月に「市民の汚した川は市民の手できれいに再生しよう」と有志10人で発足されたということですが、きっかけは何だったのですか。

中村——徳島市には138本の河川が流れています。なかでも、中心部を流れる新町川は、戦後の高度成長期には、流域の工場や家庭から出る雑排水で非常に汚れた川になり、川を描いた小学生の絵が真っ黒に塗られていたほどです。こうした惨状を見かねて守る会を結成しました。

「できる人が、できるときに、できることを」をモットーに、20年。今ではNPO法人として

会員が300名近くにまでなりました。主な活動は、1周6kmの通称「ひょうたん島」を取り囲む新町川と助任川すけしんがわでの清掃活動で、毎月1日と第3土曜日の月2回、4艘のボートに分乗して、網でゴミをすくい取っています。悪天候で休んだというのは1、2回しかありません。

また、ひょうたん島を30分かけて1周する「ひょうたん島周遊船」を1994年から毎日、無料で運航しています。最初の年は100人くらいでしたが、今では5万人くらいの人に乘っていただき、河川と水の美しさを多くの人に体験してもらっています。

最近では、吉野河川敷の清掃をはじめとして、田宮川の土手に花を植えたり、道路の清掃や街路樹の手入れなど、活動が広がっています。2002年3月からは、吉野川の水源地、高知県大川村の山林を借り入れ、次世代になぐ森づくりを目指した植樹活動を続け、地域の交流会も行っています。

さらに、毎月最終金曜日には水際コンサート。夏には吉野川フェスティバル。中秋の名月には屋形船を浮かべた邦楽の演奏。クリスマスの時期には、川から船に乗ったサンタクロースが子どもたちに約3000袋のプレゼントをもってやってくる「川からサンタがやってくる」。1月には寒中水泳など、年間を通じてさまざまなイベントを開催しています。

石の上に3年、
川の上にも10年

——20年間の活動を通じて、苦勞されたことや感じたことはありますか。

中村——苦勞はいろいろありますよ。ですが、困難を乗り越えていく楽しさがあります。何年も続けていくうちに、地域がどんどん良くなっていくというのが、目に見えてわかる。今では水質は大幅に改善されましたし、ゴミの量もずいぶん減りました。

行政による河川の水質浄化や、特産の阿波青石を使った親水護岸の整備、新町川水際公園など周辺の公園の整備なども進みました。

うちは個人の場合は年間3000円の会費を取って、会員になると「掃除をする権利」を与えています。その方が熱意のある、いい人が集まってきましたから(笑)。しかし、決して強要はしません。そばでゴミを捨てる人がいても注意せず、ただ黙ってゴミを拾っていく。小さな船に乗って自分たちの手でゴミをすくっていく姿を見ていると、市民もゴミを捨てないようになります。そういう気持ちを育てていくことが

大事です。

「ひょうたん島周遊船」も今は1000円の保険料だけは取るようになりましたが、無料だからこそ、儲けているわけではないということ、市民に受け入れられ、行政や企業も協力してくれるようになりました。国道の清掃では、朝6時半から8時までやっている、近所の喫茶店の人が「どうぞ飲んでください」と、アイスコーヒーをもってきてくれます。そうした心温まる地域づくりが大切なんです。「石の上にも3年、川の上にも10年」。10年続けたら必ず効果が出てきます。



中村英雄(なかむら・ひでお)さん プロフィール

1938年徳島県生まれ。徳島城東高校卒業後、家業の靴店を経営。1990年3月に有志10人と「新町川を守る会」を結成(1999年NPO法人化)。川の清掃や水際公園の整備、イベント開催など川を生かしたまちづくりや、山林への植樹活動なども行う。地域づくり団体自治大臣、日本水大賞国土交通大臣賞など表彰・受賞多数。

市民と行政で二人三脚のまちづくりを

——まちづくりで重要なことは何でしょうか。

中村——徳島の川づくり、まちづくりは、まず市民ができることをはじめ、それを行政が応援するという形で進みました。「市民主体、行政参加」が大事です。まず、市民が主体的に地域づくりを進めていく。それが良ければ、多くの市民が応援してくれますし、企業も応援してくれます。そして、行政の参加につながっていくのです。行政と市民がいつしよにやっついていかないと、行政がハードだけつくって、あとは市民でやれといっても、だれもついてきません。

河川環境を良くしていくことで、自然に水辺に人が集まる。そんな川を活かした地域づくりを進めていきたいと思っています。国交省も最近観光に力を入れています。観光地だけではなく、川も、駅前も、道路も、自分たちの住んでいる家も観光の一つなんです。何でもないと、歩いていても、川がきれい、道路がきれい、まちがきれいなら、それが観光になります。そういう地域づくりができれば、みんながイキイキしてきます。やはり夢をもつて取り組むことが大切です。夢がなければ、空き缶をいくら拾っても、空き缶拾いのおじさんに過ぎません。空き缶を拾うことで地域をどうしたいのか、イベントを通じて、どういう地域をつくっていくのか、そういう思いをもつて取り組んでいくことが大切なのではないでしょうか。